

編集後記

明けましてお目出度うございます。愈々1950年を迎えることになりました。20世紀も遂に半ばに達しました。前半世紀は石炭の時代を脱皮して、ガソリンの時代でした。これからの後半世紀はガソリンから原子力の時代に向つて行くのではないでせうか。そして、この後半世紀には、物質文明の大きな革命が生来するでせう。科学は、精神の問題を全く消化し盡さなければ、人類は破滅のつばにあえがなければならぬかも知れません。生命学である医学は、従つて、物質と精神の総合科学としての本質的課題を解決しなければならぬ重責を負うことになり、医人は一層神に近づかなければならぬでせう。病院はメヂカル、センター即生命のセンターとなるでせう。

一般に、文化の進んだ国は、整つた病院と学校の存在を誇りとします。平和な町、生命を尊重する国は、医療問題に非常に熱心です。世の中から病の苦悩を全くなくしてしまうことは不可能でせう。然しお互がもう少し努力したならば、病める人々が、安心して、気持ちよく病と闘えるようになる筈で、すれば必ず出来る問題が、未だ未だ沢山にあります——特に日本では、

日本の病院を、日本人の誇りとすることが出来るような日を早く迎えたいものです。何処の村や町へ行つても、平和な人々と心の豊になる病院と学校が見つかるように。

この雑誌は、未だ生れて半年を経たに過ぎず、取扱つた問題も病院の問題の序の口に過ぎませんから、大きな事は云えないのですが、今年も理想を高く堅持して行く積りです。一層馬力をかけて、病院問題を立体的に分析検討して、病院の正しい行き方を示す一方、その道に向つて進む為には何を解決しなければならないかを、病院自体は

勿論、社会は病院を如何に扱うべきかの結論を出して行き度いと思つています。

× ×
去年は、医療監視の旋風が日本中を吹き廻りました。一応医療法の規準による日本の病院の姿が明になることとせう。この監視の基準については、病院評価の理想的なものでは勿論ない事は、昨月本誌掲載のジョンソン大佐の言にも明な事です。然しお互の努力が、一步前進せしめた事実についてはお互に認めない解には行かぬでせう。但しこの努力の裏付が問題です、国民のサービスは、院病自体で出来る事は病院の責任でせうが、病院の努力では出来ない面については、その要求を求める国民の責任でなければならぬでせう。病院経済の確立——これが病院と民衆の利益と責任の限界を示す合理性に立たねばならぬ事を啓蒙しなければなりません。又病院の評価は、治療成績の基準が確立されねばならぬでしょう。この問題については本年愈々取上げられる病院分類がその方法の基礎を作るものでしょう。この治療成績の評価こそ今後研究されるべき問題ではないでしょうか。そしてこの評価の確立にこそ病院の社会的実値を証明するものでしょう。この治療成質は又病院の総合的管理の総決算の結果に左右されることが証明されるでしょう。

× ×
今月は、大河内教授の社会保障に対する御見解、尾村課長のA, M, A, 調査団の批判勧告の紹介、小林氏の病院建築に加えて、家庭婦人の病院に対する批判と希望、その他病院の行き方について参考になる諸問題を取り上げました、御批判を願ひ度い。

× ×
正月は正月らしい気分を迎えられる病院、寒いときを暖に豊にすごせる病院、これらは当局の課題でしょう。

(編 者)